様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０３１３

研究課題名（和文）漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編――中・越隣接エリアの調査研究

研究課題名（英文）The Utilization of Han Culture and Restructuring of Ethnicity under Spatial Policies: Cases for the Border Areas of China and Vietnam

研究代表者
河合　洋尚（Kawai, Hironao）

国立民族学博物館・研究戦略センター・助教

研究者番号：３０６２６３１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本科研では、中国とベトナムの国境ラインにおける漢族文化の利用、及びそれによるエスニシティの変遷について調査してきた。その結果、明らかになったことは、中国側では、漢族のサブ集団である客家や帰国華僑などの特殊な文化に着目し、それを資源として観光化や景観の形成を進めてきたことである。また、政府や企業による漢族文化の発見は、人々のアイデンティティを揺り動かし、例えば地元の漢族が客家を名乗るなど、エスニシティの変遷もみられた。それに対し、ベトナムの北部の漢族は、むしろ移住先で漢族文化を主張し、エスニシティが変化していることが分かった。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on the political utilization of Han culture and its influence on the restructuring of ethnic categories in the border areas of China and Vietnam. On the China side, local governments and companies started to pay attention to certain characteristics of Han culture, such as Hakka culture and overseas Chinese cultures, and promoted tourism and landscape construction using these cultural resources. At the same time, the “discovery” of the new culture and its political and economic use led to a change in the ethnic identity of local inhabitants, including that of the Hakka. On the other hand, on the Vietnam side, we can confirm similar situations, but inhabitants rather tended to use their cultural characteristics after immigration.

研究分野：文化人類学

キーワード：漢族　空間　エスニシティ　中国　ベトナム　客家　ンガイ人

１．研究開始当初の背景

（１）中国とベトナムの境界部は、多くの民族が住む地であり、とりわけ多彩な少数民族文化が社会的に着目されてきた。だが、それとは対照的に、このエリアに多数居住している漢族住民には長いこと焦点が当てられることはなく、民族政策においても観光化においても漢族は周辺的な扱いを受けてきたといえる。ところが、21 世紀に入ると、少数民族観光がピークを迎えたことにより、政府や企業は徐々に漢族の「特殊文化」に着目するようになってきた。したがって、中国とベトナムの境界部において、漢族文化がいかように資源化され、それが人々の暮らしやエスニック・カテゴリーへ影響をもたらしたかの調査が必要となってきた。

（２）中国とベトナムの境界部において、これまで主に少数民族に焦点が当てられてきたことは、研究面でも同じである。例えば、雲南省では漢族は人口の過半数を占めるにもかかわらず、漢族についての系統的な研究はいまだに日本では存在していない。他方で、ベトナムの北部の漢族についても調査の難しさから日本ではほとんど研究がなされていない。したがって、中国とベトナムの境界部における漢族の動向を把握することが当面の課題となっていた。

２．研究の目的

（１）以上の背景を踏まえ、本研究は、中国とベトナムの境界地において漢族文化がいかように利用されるようになっているのかについて解明することを目的に調査を開始した。中国とベトナムはいずれも社会主義国であり、漢族文化の利用に関しては政府が主導な役割を果たす。しかし、本研究では、政府だけでなく、開発業者、旅行会社、華僑から地域住民にいたる多様なアクターを調査の対象とし、彼らがいかなる目的により、どの漢族文化に着目し、どのようにそれを使用してきたのかについて、空間をキーワードとして分析した。

（２）また、漢族文化の資源化や利用が、住民のエスニック・カテゴリーにいかなる影響を及ぼしてきたのかについても調査の対象とした。例えば、政府による漢族文化が強調されることにより、漢族間または漢族－少数民族間でエスニック・カテゴリーの変化がおこっていないか、さらにそれが漢族文化の利用にフィードバックされているか否かについて調査をおこなった。

３．研究の方法

（１）漢族と一言でいっても、その内部には多様な集団がある。それゆえ、本科研では、まず私が長年研究に携わってきた客家を機軸とし、そこから他の漢族に広げていく手法を採用した。

（２）本科研の調査では、文化人類学の手法に基づき、文献研究だけでなく、現地におけるフィールドワークをおこなった。文献研究では、日本語、中国語、英語、フランス語、ベトナム語で書かれた先行研究を整理するとともに、現地資料を収集し解読した。また、中国の雲南省南部、広西チワン族自治区南部、及び、ベトナム東北部のクアンニン省をフィールドワークの拠点とし、必要に応じてそこから調査の手を広げていく手法をとった。

（３）特にベトナム北部では漢族の大半が移民していいたため、クアンニン省だけにとどまらず、そこから移住した人々を追いかけ、中国広東省の花都華僑農場などでも調査をおこなった。すなわち、中国－ベトナム境界部におけるフィールドワークと平行して、そこから移住した人々とのネットワーク関係を調べる、マルチサイトワークを新たな調査法として導入した。

（４）調査地の範囲が広いため、現地で長期のフィールドワークを実施した経験のある３名の人類学者と共同研究をおこなった。具体的には、中国雲南省では阿部朋恒氏、広西チワン族自治区では陳碧氏、ベトナムでは呉雲霞氏に調査の補助や通訳（特に雲南語とエトナム語）をお願いした。

４．研究成果

（１）漢族文化の利用の形態については、中国側とベトナム側で温度差があることが明らかとなった。中国の雲南省南部および広西チワン族自治区では、これまで観光化や文化的景観の創造に少数民族文化が着目されてきたが、近年になって漢族文化にも着目しはじめている。それに対して、ベトナム北部では大半の漢族が南部や国外に移住していることもあり、漢族文化を利用した動きがほとんどみられていない。

（２）中国サイドでは、漢族のなかでも特色をもつとされるサブ集団の文化が利用の対象となっている。広西チワン族自治区では政治経済的に利用される対象と特になっていたのが客家の文化であった。客家とは、古代中国王朝の所在地である中原から、戦乱を避けるために数百年の時をかけて南方に移住したとされる集団である。一般的に客家には他の漢族とは異なる特色ある文化をもつとみなされるため、そうした特色を文化資源として投資の誘致や観光化を促進する動きが 1990 年代後半以降、特に顕著となっている。だが、調査から明らかであったのは、広西チワン族自治区の客家は、かつてはンガイ人などと自称しており、自らが客家であることを知らなかったということである。政府の主導で客家文化を用いて空間的特色を出す政策

が前面化してから、彼らは客家としての自己を強く意識し始めただけでなく、客家文化を自ら利用して利益を得ようとする動きもみせるようになった。同時に、地元の広東人など客家ではなかった人々も客家を名乗りだすなど、エスニシティの再編がみられることも確認できた。

（３）中国西部では、他に四川省や重慶市でも客家文化を利用した観光開発が進んでおり、現地のエスニック・アイデンティティに変化が生じていることが、調査から判明した。ただし、雲南省では、客家がほとんどいないと学術的にも社会的にも考えられているため（この見解については今後の調査で認識を改める必要があると私は考える）、客家を資源とした空間開発はなされていない。そのかわりに、雲南省では、華僑を文化資源として着目し、観光化や地域開発に生かすようになっている。ここでキーワードとなっているのが「僑郷（きょうきょう）」、すなわち華僑の故郷である。雲南省から移住した華僑のなかには少数民族も含まれているが、僑郷の建設においては、漢族文化が主な対象とされている。特に、ベトナムに近い紅河県では、現在ほとんど華僑とのつながりがなく、また帰国華僑もほとんどいないのに、雲南有数の僑郷として建設されるようになっている。その背景としては、近隣の元陽県でハニ族棚田郡がユネスコの世界遺産に認定されたことがあり、そこを訪れる観光客を誘致しようという経済的な意図が働いているのである。

（４）中国とは対照的に、ベトナムでは漢族文化を資源とした観光開発や文化的景観の建設は特におこっていない。このことはベトナム北部の歴史的な経緯と深いかかわりがある。ベトナム北部の漢族は、主にホア（華）族、サンジウ族、ンガイ族に分けられる。ホア族とはいわゆる華僑であり、サンジウ族は実質的にはヤオ族が主体、ンガイ族は客家に属する。ンガイ族は、広西チワン族自治区に分布するンガイ人と同系統の集団であり、同様にもともと客家としてのアイデンティティをもっていなかった。彼らはもともと北部に居住していたが、1978～79 年に華人排斥運動がおこったことにより、大部分がベトナムの南部、中国、オーストラリア、欧米諸国などに拡散して移住した。また、ベトナム北部に残った少数の漢族は、漢族としてのアイデンティティや誇りを有してはいるが、歴史的・政治的な要因により、漢族としての団体組織も結成しておらず、表面的にはベトナム人として暮らすことを選択している。それゆえ、漢族文化を資源化する動きは、少なくとも中国との境界部においては見られないことが調査より分かった。

（５）ただし、ベトナム北部の漢族の移住先を追跡調査していくと、興味深いことが判明した。彼らは、移住先では漢族文化を積極的に利用し、時として文化的景観を創造する担い手となっていたのである。例えば、ベトナム南部に移住したンガイ人は、南部のホア族籍客家と接触することにより、客家としての自意識を強め、近年では会館も建設するようになった。また、中国広東省の華僑農場に移住したンガイ人は、客家としての自意識に目覚め、中国で典型的な客家文化とされるシンボルを利用して、経済的利益を追求するようになっている。他方で、彼らは、中国ではンガイ人としての自意識も残しており、ベトナム人、華僑、客家、ンガイ人という多重のアイデンティティを時と場合によって使い分けるようになっている。

（６）以上より、中国－ベトナム境界部における漢族文化の資源化については、同じ社会主義諸国といっても、歴史的・政治的な要因により、中国側とベトナム側としては異なる情況が生じているといえるだろう。中国とベトナムを比較すると、中国が政府の主導で漢族文化を空間政策に生かそうとしているのに対し、ベトナムでは漢族の少なさと資源としての認識のなさから漢族文化にはまったくといいほど着目されていない。それゆえ、ベトナムの漢族は、ベトナムという空間においては自らが漢族文化を主張することがないが、移住先の空間においては、むしろ自らが担い手となって漢族文化のサブ文化（客家など）を活用している。また、こうした漢族文化の客体化と資源化は、近年、エスニック・カテゴリーを再編させる一つの動力となっていることも、本科研の調査より明らかになった。

（７）今回の調査を通して、いくつかの新たな課題や問題意識が浮上した。第一に、漢族文化を資源化し文化的景観をつくることによってエスニック・アイデンティティが変化していくという動きは、早くて 1990 年代より始まっており、ここ２～３年のうち新たにみられるようになった事例も確認できた。こうした動きが今後どのように展開していくのかを調べるために、長期的な視野をもった調査が必要となってくる。第二に、特にベトナム北部のンガイ族の移住については、時間等の制約により、ベトナム南部のホーチミン周辺と中国の華僑農場でしか調査ができなかった。それゆえ、今後はオーストラリア、アメリカ、カナダなどに調査を拡大し、より広い視野から漢族文化の利用形態を知るとともに、中国やベトナムとのつながりについて探求する必要がある。その他、今回の科研では、フィールドワークの副次的な産物として、先行研究のほとんどない雲南省とベトナムの漢族にまつわる概況を理解することができた。これらの研究をさらに深めることで、雲南およびベトナム北部の漢族の先駆的な成果を残すことが今後の成果として期待で

きる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 河合洋尚・呉雲霞「ベトナムの客家に関する覚書――移動・社会組織・文化創造」『華僑華人学会』（日本華僑華人学会）、査読有、No.11、2014、93-103。

② 河合洋尚・呉雲霞「ベトナム客家の移住とアイデンティティ――ンガイ人に関する覚書」『客家與多元文化』（日本客家文化協会）、No.9、2004、26-51。

〔学会発表〕（計５件）

① 河合洋尚「越南客家的移居与文化景観建設」国際シンポジウム「湄公河紅河流域生態与文化多様性国際学術論壇」、2015 年 10 月 24 日、プーアル大学（中国・雲南省）。

② 河合洋尚「客家空間的拡張――中国南部客家認同感、文化、景観的建構」国際シンポジウム「激活客庄研討会」2015 年 6 月 27 日、交通大学客家研究院（台湾・新築）

③ 河合洋尚・阿部朋恒「中国雲南省における＜僑郷空間＞の創出」2014 年 8 月 2 日華僑華人学会研究会、東京大学（東京）

④ 河合洋尚「ベトナム客家の移住とアイデンティティ――ンガイ人に関する覚書」国際学術シンポジウム「客家と多元文化」（日本国際客家文化協会主催）、2014 年 8 月 3 日、明治大学（東京）

⑤ 河合洋尚「越南客家的神佛信仰与宗教景観的創造」国際シンポジウム「中日人類学民族学理論刷新与田野調査」2013 年 11 月 19 日、中国社会科学院民族学人類学研究所（中国・北京）

〔図書〕（計２件）

① 河合洋尚・阿部朋恒「中国雲南省における＜僑郷空間＞の創出――紅河県を事例として」川口幸大・稲澤努（編）『僑郷――華僑のふるさとをめぐる表象と実像』行路社、2016、291-314。

② 夏遠鳴・河合洋尚（編）『全球化背景下客家文化景観的創造――環南中国海的個案』広州：暨南大学出版社、全 212 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者

河合　洋尚（KAWAI Hironao）
国立民族学博物館・研究戦略センター・助教
研究者番号：30626312